



一人暮らし認知症高齢者を行政機関につなげる地域 住民の思い

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松下, 由美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005662

資 料

一人暮らし認知症高齢者を行政機関につなげる 地域住民の思い

Thoughts of community resident which connects single older adults with dementia to administrative system

松下由美子¹⁾

Yumiko Matsushita

キーワード：一人暮らし，認知症，高齢者，地域住民，行政機関につなぐ思い
Keywords: single, dementia, older adults, community resident,
thoughts of making contact with administrative agency

抄 録

一人暮らし高齢者の認知症状に気づき，行政機関につなげる住民の行動は，どのような思いに動機づけられるのか明らかにすることを目的にインタビュー調査を実施した。インタビュー対象者は，50歳代男性2名，60歳代女性1名，50歳代女性1名の合計4名であった。

分析の結果，住民が一人暮らし高齢者の認知症状に気づき，行政機関につなげる思いには2つのパターンがあった。まずパターン1では〈認知症状が発現する以前からの定期的な関わり〉が基盤にあり，その関係性の中で〈徐々に変化していく一人暮らし高齢者の様子に気づく〉こと，そして《このまま放っておけない気持ち》に触発されて行政機関につながっていた。一方パターン2では，〈徐々に変化していく一人暮らし高齢者の様子〉を「迷惑行為」として捉えた住民が行政機関につながっていた。

今後は，一人暮らし高齢者が周辺住民と〈定期的な付き合い〉を育む機会を創出していくことが課題となる。

I. はじめに

諸外国の報告によると，アメリカでは認知症高齢者の約10～30% (U.S Congress, Office of Technology Assessment, 1990)，カナダでは31.5% (Tuokko H, et al., 1999)，英国では25% (Alzheimer's Society, 2003) が独居生活者である推計されている。わが国の独居認知症高齢者については現在推計されておらずその実数は不明であるが，これらの結果から概算すると，日本においても認知症高齢者の1～3割は地域で独居生活をしていると推定できる。

これまでわが国の見解は，認知症高齢者が一人暮らしをすることはたとえ直接介護の必要がない

状態であっても稀であるとされ (中島, 1992)，彼らに関する研究はほとんどなされてこなかった。しかし諸外国の研究を概観すると，軽～中等度の認知症状であれば80%以上の一人暮らし認知症高齢者が他者への被害や損害，また自損の問題を起こすことなく，安全に暮らすことができる (Tierney M, et al., 2001)。また，認知症状が比較的軽い早期段階で適切な在宅支援サービスが投入されれば，認知症高齢者も住み慣れた自宅で，つまり，なじみの家を離れるリロケーションダメージを受けることなく長期的な在宅生活が可能と考えられる。

その一方で，一人暮らし高齢者には身近で彼らを見守る同居介護者が不在であるため，初期

の認知症状は見逃されやすく (Wilkins C, et al., 2007; Cox C, et al., 2003), たとえ診断を受けたとしても「一人暮らし」をしていることから自立度が高いと評価され, 認知症の進行レベルは軽く見積もられることが多い (Cox C, et al., 2003)。また, 一人暮らし認知症高齢者の約15~30%が社会サービスに全くつながっていないことも諸外国では指摘されている (Edwards D, et al., 2007; Ebly E, et al., 1999; Webber P, et al., 1994)。

また, 一人暮らし認知症高齢者を取り囲むネットワークは血縁者よりも隣人や友人によって構成されることが多く (Edwards D, et al., 2007; Wilkins C, et al., 2007; Ebly E, et al., 1999; Tuokko H, et al., 1999; Webber P, et al., 1994), 不特定多数の支援者が関与していてキーパーソンが特定できない, あるいは支援者が見出せないことも多いという (Edwards D, et al., 2007; Tuokko H, et al., 1999; Ebly E, et al., 1999; Webber P, et al., 1994)。また, 友人, 隣人からなるネットワークは個人の善意や厚意に依るところが大きく, ネットワーク間の関係性が悪くなると支援提供は不安定になりやすいため (浅川ら, 2009; Edwards D, et al., 2007; 山本ら, 2006; 小玉, 2004; 関ら, 2002; Ebly E, et al., 1999), 時には本人不在のまま, 友人, 隣人の裁量で近世管理や経済的支援に関する意思決定が行われ高齢者の権利を脅かすこともあるという (関ら, 2002)。こうしたことから, 一人暮らし認知症高齢者を支える社会資源として近隣住民を巻き込んだネットワークは重要であるが (山本ら, 2006; 浅川ら, 2009), 近隣の善意をいかにして活用するのか今日の課題となっている (関ら, 2002)。

そこで今回は, 一人暮らし高齢者の認知症状に気づき, 行政機関につなげる住民の行動は主とどのような思いによって動機づけられるのか調査した。なお, ここでいう「思い」とは, 物事から自然に感じられる心の状態のこと (広辞苑)。

今回の調査から「住み慣れた地域での生活を継続できるよう地域社会全体で認知症高齢者の生活を支える仕組み」に向けて, ひとつの示唆を得ることができると思う。

II. 調査目的

この調査の目的は, 住民は一人暮らし高齢者の認知症状に気づき, 主としてどのような思いに動機づけられて行政機関につなげるのか明らかにすることである。

III. 調査の方法

1. インタビューデータの収集時期

インタビューデータを収集する調査は2013年1月~2014年3月に行った。

2. 調査対象地域の特性

インタビュー調査は近畿圏内にあるA市で行った。A市は, 1970年代頃から都心のベッドタウンとして開発が進み, 一時期には著しい人口増加があったが, 現在の人口増減については横ばいの状態が続いている。

インタビューを行った住民の居住地は, 高齢化率が約35%と現在入居者の高齢化が進んでいる市営住宅が並ぶ地域である。居住者間の関係は, 古くからの隣人, 友人同士で付き合いがあれば比較的親密な関係を築いているが, その一方で, 新たに入居してきた住民や, 親しかった隣人, 友人を引越しや死亡などで失った住民たちは孤立しやすく, 新しい関係を構築していくことが難しいといった特性をはらんでいる。

3. インタビューデータの収集方法

インタビューデータ収集には, 一人暮らし高齢者の認知症状に気づき, その地区を管轄する地域包括支援センターまたは市役所につなげた住民にインタビューを行う方法を用いた。インタビューでは, まずは当該高齢者の認知症状に「気づき」行政機関に「つなげた」経緯について話してもらい, その上で, 当該高齢者の認知症状の「気づき」に至った実際のエピソード, またその時に感じたこと, さらに, 行政機関に「つなげる」に至った動機や考え, またその際にどのような思いを当該高齢者に持っていたのかについても語ってもらった。

4. インタビューデータの分析方法

分析は質的記述的に行った。インタビュー内容は許可を得てICレコーダーに録音し, すべて逐語に書き起こした。

データ内容を分析する際には, 逐語録のすべてのデータを意味のまとまりごとに切片化した後, 一人暮らし高齢者の認知症状に気づいたり, 疑ったりした時, 住民はどのような思いを持って, またはどのような思いに駆られて, または動機づけられて行政機関につなげるのかという点に着目しそれに関する部分を抜き出した。次に, 前後の意味を文脈で確認し, それぞれの内容の類似性と差異性に着目しながら一人暮らし認知症高齢者を行政機関につなげる地域住民の思いを示す表示を作り出す作業を繰り返して命名していった。

また、示された結果については、当該地域を担当し、地域特性を熟知している地域包括支援センターの社会福祉士3名から意見をもらい、妥当性を検討した。

IV. 倫理的配慮

調査は、千里金蘭大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。なお調査遂行の際には、インタビュー対象者となる住民だけでなく、語られた話の中に登場する認知症高齢者に対する倫理的手続きにも留意した。そのために、調査過程で明らかとなったすべての方々の個人情報については、匿名性を保持するよう記号に置き換えて管理し、インタビューをおこした逐語録やインタビューノートは、施錠した場所で保管して管理した。

また、インタビューの依頼を行う際には事前に行政機関から調査協力の意思を確認してもらった。その上で、調査協力の意思を確認できた住民に対して、研究者から再度、今回のインタビュー協力を辞退しても何ら不利益を被ることはないことを説明し、本人から直接インタビュー協力の同意を書面で得た。さらに、協力者の都合が悪い時は調査を止める、インタビューは協力者の都合の良いプライバシーが確保できる場所で実施するなど研究協力による不利益を回避するよう留意した。また、たとえインタビューが終了した後でも、協力者が希望すればそれを分析対象としない途中辞退の確保にも留意した。なお、インタビューの語りの中で見出されたヘルスニーズに関しては同意を得た上で関係機関につなげた。

V. 調査結果

調査を行った2年10か月の期間中（平成24年5月～平成26年3月）、認知症状が疑われ、その旨の連絡が行政機関にあった一人暮らし高齢者の事例は8件であった。そのうち2件は連絡が匿名であったため行政機関につなげた住民が特定できなかった。また残り6件のうち2件は、行政機関からの調査協力の依頼の際に、協力が得られずインタビューは実施できなかった。その結果、今回インタビューが実施できたのは4件、その内訳は50歳代男性2名、60歳代女性1名、50歳代女性1名で、この4名のインタビューを分析対象とした。

表1. インタビュー対象者の属性

年齢	性別	一人暮らし高齢者との「定期的な関わり」の有無とその関係性
A氏	50歳代 女性	有 自営業を営む店主とその常連客（1週間に約1～2回の頻度で買い物に来る）
B氏	50歳代 男性	有 露天商を営む店主とその常連客（3～4年前から、毎日に話をしに店に来る、商品を買うこともある）
C氏	60歳代 女性	無 （居住地は近いが） それまで面識はない
D氏	50歳代 男性	無 （居住地は近いようだが） それまで面識はない

4名のインタビューを分析した結果、住民が一人暮らし高齢者の認知症状に気づき、その旨が行政機関につながるには、図1が示す2つのパターンがあることが示された。なお文中の表記方法としては、《 》は認知症状を呈する一人暮らし高齢者を行政機関につなげる住民の思いを、〈 〉はそのような思いに至るまでの出来事を、また「 」はインタビューからの引用を記している。

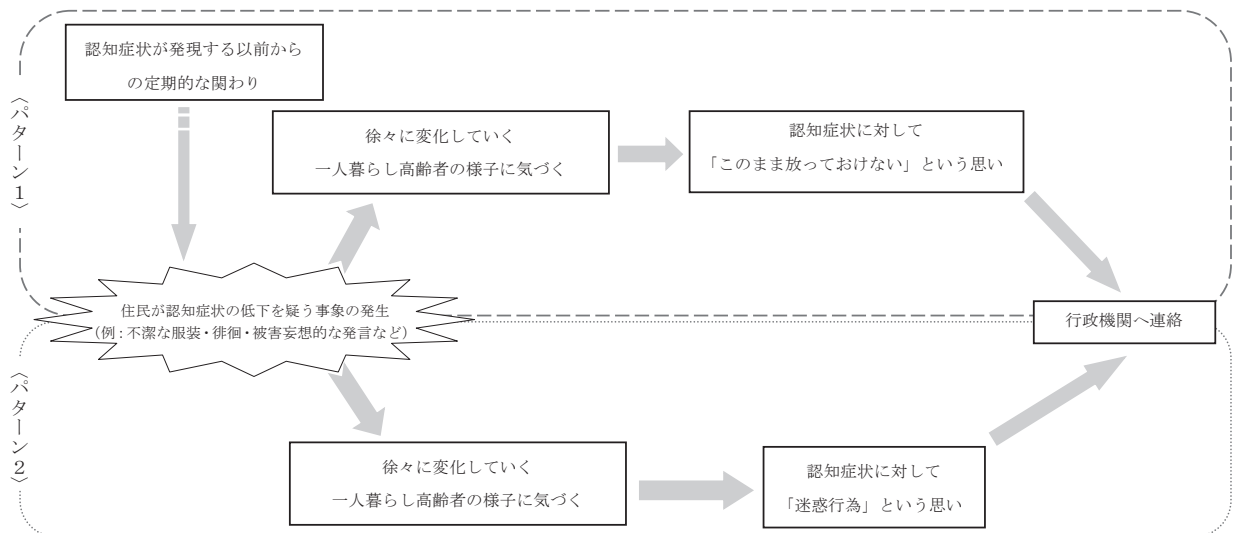


図1. 地域住民の思いによって認知症状を呈する一人暮らし高齢者が行政機関につながる経過

まずパターン1は、地域に住む一人暮らし高齢者の認知症状が発見される最初の契機として、まずは〈認知症状が発現する以前からの定期的な関わり〉が基盤にあることが示された。ここでいう〈定期的な関わり〉とは、近隣に住む近所同士としての関係や民生委員による見守り活動といったようなものではなく、例えば10年以上その地域で露天商を営んでいる人や自営業を営む人たちが「よく買い物に来る常連のお客さん」として当該高齢者を認識しているといったようなことである。このように、こうした〈認知症状が発現する以前からの定期的な関わり〉は、お互いの緊密な関係、深い関係が必ずしも成立しているわけではなく、双方が見知った人としてなんとなく分かりあっている、認識し合っているという程度のゆるやかな関係性であることも含まれていた。

「あのおばあさん（行政機関につないだ一人暮らし高齢者のこと）がどこに住んでるのかなんて詳しいことまでわかんない、名前なんてのも全然知らなかったけど、ここら辺に住んでるんだらうなってことは…。もう長いもん。そうね、5年位前からかなあ～、ほんとに週に1回？ 2回？ は来てね、お惣菜買って。お店には、ずっとその前からちよくちよく来てたからね」（50歳代女性）

そして、こうした〈認知症状が発現する以前からの定期的な関わり〉を基盤にした関係性の中で、ある時〈徐々に変化していく一人暮らし高齢者の様子に気づく〉ことが、地域において一人暮らし高齢者の認知症状が発見される重要な契機となっていた。なお、ここで示す〈徐々に変化していく一人暮らし高齢者の様子〉とは、具体的には「服装（身だしなみ）が汚ない」「季節に合っていない」や「ごみの回収日が守れない」「度々迷子になっている」「（被害妄想的な）苦情を訴える」「金銭をせびる」「お釣りの計算が出来ないようでもつとたくさんの一万円札を所持している」といったようなことである。

「真冬でもそんなん（薄手のシャツと半ズボン）で、そんな具合になってきて。『寒いんちやいますか、服着な、風邪ひきませ』言うても『ええねん、大丈夫や』って、でも本人ブルブル震えてるんですよ（笑い）。

～中略～ そのうち『お金貸して』言うようになって、それがもう毎日に…。ここ（店）来たら『お金貸してくれんか』『金無いんや』って」（50歳代男性）

『これ昨日も買いはったから、きつとお家にありますよ、要らんのんちやいますか』って。『家の中探したら、あると思いますよ。買われますか？』って。それでも買って行きはるんです。『いや、ないんや』言うて。『探すんめんど（面倒）臭いから、こう（買う）とく』言うて。そんなん、絶対家に、何冊もあるんちやうかと思うんですけどね」（50歳代女性）

そして、このような高齢者の変化を目の当たりにすると〈認知症状が発現する以前からの定期的な関わり〉をしていた人たちは、長年の関係性があったが故に、高齢者のこうした状況に対して《このまま放っておけない》思いが自然と沸き起こり、見て見ぬふりのまま放置できないという内的な衝動に触発されて、自ら行政に認知症状の低下が疑われる高齢者の存在を連絡する、相談するなどの対応をしていた。そして、こうした連絡によって一人暮らし高齢者は結果的に行政機関につながっていったことが示された。

「自分の親、主人の親がそうやったらって、まあ、親でなくても自分がそうになったらって（笑い）思たらね、なんか、とてもそのまま見過ごせないっていうか、なんか放っておけないっていうか、そんな気持ちになりましてね。～中略～ そうやね。もう、ずっと長いこと来てくれてはるお客さんやし、初めての人（客）には、とてもそんなことしませんけど、もちろん、しませんけど。ずっと来てくれてはる人やから、だから、なんかそんな気持ちになったんかなあー、放つとかれへんなあーって。なんかそんな気持ちにもなったんでしょね（笑い）」（50歳代女性）

その一方で、他方のパターン2では、認知症状として表出された〈徐々に変化していく一人暮らし高齢者の様子〉が、周辺住民にむしろ〔迷惑行為〕として捉えられ、そういった場合には〔苦情〕という訴えとなって行政機関に連絡されるという経過を辿っていたことが示された。

「ごみの分別日がわからないみたいで。～中略～（当該一人暮らし高齢者のことは）知らない、ってもしかしたら見かけたことくらいはあるかもしれないけど、あんまりね、見かけない。見かけないって、こっちが知らないだけかもしれないけど。～中略～ そうするとみんなここ（道）が汚れちゃうでしょ、カラスなんかもね、あるし…。掃除も大変、

あっちこっちに散らばって。だからちょっと迷惑…、迷惑っていうか、なんかしてたね。

～中略～ それでね、(連絡)したんだ」
(60歳代女性)

「ウロウロしてるし、なんか様子が変わるから。突然『おじさん、お金貸してくれ』って変わらう。知り合いでもなんでもないのに。

～中略～ それで、そんな人が近くにいるんだなって。これは、ちょっと火(火事)でも出されたら困る、困ったなって。～中略～

これはもう(火事にでもなって)何かあったからじゃまずい、遅いと思って、(行政機関に)言ったんだ。こんな人がいるけど、大丈夫なんですかねって」
(50歳代男性)

VI. 考察

わが国では、認知症に対する誤解や偏見を払拭するさまざまな対策が進められ、認知症の人たちに対するイメージは徐々に変わりつつある(流石ら, 2010)。しかしその一方で、一人暮らし高齢者が認知症を疑われると、たとえそれまでに小火などの事象がなくても近隣住民から退去を求められることもめずらしくない(沖田, 2007)。今回の調査結果においても、認知症状を呈した一人暮らし認知症高齢者の行動は周辺住民から迷惑行為として捉えられ、否定的感情を伴う苦情となって表出されており、認知症に対する誤解や偏見は今なお地域に根強く残っていると推測できる。

こうした現状を踏まえ、地域住民に対し認知症に関する正しい知識を普及することは認知症に対する誤解や偏見を払拭し、地域住民による認知症高齢者への支援につながるとされ(古村ら, 2010)、今日では、厚生労働省が主催する認知症サポーターキャラバンをはじめ、地域住民の認知症に対する理解を目指した研修会(流石ら, 2010; 永田, 2008)や啓発活動(久保ら, 2009)といった取り組みが積極的に実施されている。しかしその一方で、認知症に関する知識を持っていることが認知症高齢者を支援する姿勢に必ずしも結びつくものではないとする報告もあり(木村, 2008)、地域住民による認知症高齢者への自発的な支援行動を促進するには、認知症に関する知識の普及だけでなく他のアプローチも必要である。

今回の調査では、認知症状を呈した一人暮らし高齢者に対する地域住民の反応として、このような否定的感情の訴えがある一方で、他方では《こ

のまま放っておけない気持ち》という温かい情緒的感情が発起されることも少なくなく、むしろ、こうした肯定的な感情が契機となって認知症高齢者への自発的な支援行動が地域住民に促されていく可能性が考えられた。

ただし、援助を必要とする他者への《放っておけない気持ち》は、必ずしも〈定期的な関わり〉をもとにしていつも発起されているわけではなく、例えば初対面の者に対しても《放っておけない気持ち》が喚起されることが度々ある。ところが、特に認知症状の自覚を持たない認知症高齢者については、家族が受診を勧めたり(鹿野ら, 2003)、また家族ではない第三者が支援につなげる相談や報告をしたりすることは、「本人のプライドを傷つける」「おせっかい」また「本当に認知症かどうか自分の判断に自信がない」といった理由から、多くの場合はためらいや躊躇を伴う(品川ら, 2007)。そのため“定期的”ではない“一時的”な関わりの場合には、たとえ《放っておけない気持ち》が発起されたとしても、例えば、今回のインタビューでA氏が「初めての人(客)には、とてもそんなことしませんけど」と語ったように、行政機関につなげるといような実際の援助行動が起こされることは数少ないと推測できる。

こうしたことを踏まえると、地域住民の一人暮らし認知症高齢者に対する《このまま放っておけない気持ち》が、行政機関につなぐ実際の援助行動となるには、その前段階として、こうしたためらいや躊躇を乗り越えていけるような双方の間で積み重ねられてきた〈定期的な関わり〉特に〈認知症状が発現する以前からの定期的な関わり〉が住民と高齢者との間で既に形成されていることが大切な基盤となっていると考えられる。

ただしその一方で、今回のインタビューで示された〈定期的な関わり〉は、必ずしもお互いが相手の居住地を知っている、あるいは連絡を常時取り合っているといったような深く、親密な関係性である必要はなく、もう少し緩やかな、お互いがなんとなく顔見知りといった程度のもので〈定期的な関わり〉としての関係は成立する可能性が示された。そして、こうした緩やかさを持つ〈定期的な関わり〉であれば、プライバシーに対する干渉と認識されることが少なく(東ら, 2009)、関係を構築する上でのトラブルは比較的避けられやすい。そのため、親密な関係にあるような固い絆は期待できないが、それまで培ってきた関係を破綻に導く出来事の発生は多くの場合抑えられ、そのために、緩やかながらも比較的長い付き合い合

い、つまり長期的な関係の保持が形成されることが期待できる。そして、一人暮らし高齢者と誰か周辺住民との間で〈定期的な関わり〉が成立すれば、たとえ緩やかであったとしても培われてきたその長期的な関係性の中で、周囲の住民は一人暮らし高齢者の〈徐々に変化していく様子に気づく〉ことが可能であり、さらには自発的な《放っておけない気持ち》に触発されて、認知症状を呈する一人暮らし高齢者は行政機関につながっていくことができると期待できる。

以上のような結果を踏まえると、今回の調査対象地域では古くからの人間関係が継続している近隣住民の間では、おそらく自発的な援助行動が既に行われていると推測できる。その一方で、この地域に新たに参入した住民や、それまでの友人関係を失った住民たちには、たとえ緩やかなものであったとしても〈定期的な関わり〉が形成できる場を設けたり、その機会を意図的に創り出したりすることによって、一人暮らし高齢者が行政機関につながっていくことが可能になると考える。

しかしながら、今日では町内会、自治会など地縁組織活動を促す取り組みが行われているものの(中沢, 2012)、その一方で、地域住民の自治会活動に参加する頻度は低下傾向にあるという(内閣府, 2007)。そのため、一人暮らし高齢者が周辺住民と〈定期的な関わり〉を育む機会や場をいかにして作り出していくのか、今後はそうした仕掛けの創出について探求することが、今回の調査によって示唆された新たな課題と考える。

今回の調査の限界

今回の調査の限界として、インタビュー対象が4名と少なく、地域住民のどんな思いが一人暮らしをする認知症高齢者の発見につながっているのかについて、さまざまな住民の思いの一部が示されたにすぎないと考える。今後は、インタビュー対象者を増やすためにリクルート方法を検討する、また、住民同士の付き合いや関係性は都市部と農村部では異なると推測できるが、今回のインタビューではそのような地域特性について考察できていないので、これらの点を踏まえた上で、どのような思いに動機づけられて一人暮らし高齢者の認知症状に気づいた住民が行政機関につながったのか、詳細に探求していく必要がある。

さらに、地域住民による一人暮らし認知症高齢者への《このまま放っておけない気持ち》は、〈認知症状が発現する以前からの定期的な関わり〉を

基盤に形成されることを示したが、住民同士が手軽に集う場の不足や、近所付き合いへの負担感、また見守りの拒否や無関心といった課題を抱える地域(舩田, 2011)において、いかにして住民同士の定期的な関わりを育んでいくのか、その点についても何ら言及できていない。今後は、地域におけるどのような活動また方略が住民同士の定期的な活動を促進するのかについても探求していきたい。

謝辞

今回、インタビューにお答えいただきました住民の皆さまには、調査にご協力いただき感謝申し上げます。また、調査の趣旨に賛同し、結果の内容検討において、さまざまご助言、見解を頂きました地域包括支援センタースタッフの方々にも、心より感謝申し上げます。

文献

- Alzheimer's Society. (2003) : Demography, Dementia worldwide. (http://www.Alzheimers.org.uk/site/scripts/documents_info.php?categoryID=200167&documented=412, 2010.3.15)
- 浅川典子, 今泉たまき, 橋本志麻子, 他 (2009) : 一人暮らし認知症高齢者に対するケアマネジャーの支援に関する研究—サービス導入後のモニタリングにおける支援の特徴—. 日本老年医学会雑誌, 8(2), 197.
- Cox C., Albusu K. (2003) : The impact of caregiving for a relative with Alzheimer's disease : a comparison of those Caring for persons living alone, spousal caregivers, and co-resident adult children. Journal of Mental Health & Aging, 9(1), 23-33.
- Ebly E., Hogan D., Rockwood K. (1999) : Living alone with dementia. Dementia and geriatric cognitive disorders, 10(6), 541-548.
- Edwards D., Morris J. (2007) : Alone and confused: community-residing older African Americans with dementia. Dementia, 6(4), 489-506.
- 福川康之, 川口一美 (2011) : 孤独死の発生ならびに予防対策の実施状況に関する全国自治体調査. 日本公衆衛生雑誌, 58(11), 959-966.
- 東亜紀, 高橋謙造, 丸井英二 (2009) : 過疎農村における育児の背景—医療人類学的研究—. 母性衛生学会誌, 50(2), 381-388.
- 木村典子 (2008) : 一般住民の身近に認知症高齢者がいた場合の対応に関する意識—認知症についての知識・不安との関係. 愛知学泉大学・短期大学紀要, (43), 89-94.
- 小玉敏江 (2004) : 独居高齢者の痴呆症発症に伴う交友関係の再編とサポートネットワーク. 日本公衆衛生学会総会抄録集, 63回, 737.
- 古村美津代, 中島洋子, 草場智子 (2010) : 民生委員の認知症高齢者及び家族への意識と支援. 日本看護福祉学会誌, 15(2), 69-80.
- 厚生労働省 : 認知症サポーター100万人キャラバン.

- (<http://www.caravanmate.com/> [2015.8.2]).
- 久保昌昭, 岡本直子, 谷野秀夫, 他 (2009): 認知症のある人とのかかわり度からみた地域住民への効果的な啓発活動のための分析, 日本認知症ケア学会誌, 7 (1), 43-50.
- 舛田ゆづり, 田高悦子, 臺有桂, 他 (2011): 住民組織からみた都市部の孤立死予防に向けた見守り活動におけるジレンマと方略に関する記述的研究, 日本公衆衛生雑誌, 58(12), 1040-1048.
- 内閣府(2007): 平成19年度版 国民生活白書. 時事画報社, 東京.
- 中島紀恵子 (1992): 老人看護学 改訂版. 真興交易医学出版部, 405-432, 東京.
- 永田久美子 (2008): 認知症対策の動向と課題. 保健師ジャーナル, 64(9), 776-681.
- 中沢卓実 (2012): 「孤独死ゼロ作戦」に学ぶ自治会活動 (特集「孤独死」を克服する). 住民と自治, 596, 14-17.
- 沖田裕子 (2007): 地域で支える認知症ケア. 月刊総合ケア, 17(8), 17-20.
- 流石ゆり子, 小山尚美, 村松照美, 他 (2010): 高齢者支援組織を対象に実施した認知症ケア啓発研究会の評価. 山梨県立大学看護学部紀要, 12, 29-41.
- 関なおみ, 大越扶貴 (2002): 単身痴呆性高齢者の在宅生活支援に行政援助職が苦慮した事例の分析. 保健医療社会学論集, 13(2), 55-65.
- 鹿野由利子, 花上憲司, 木村哲朗, 他 (2003): 痴呆の早期受診はなぜ難しいのか—家族からみた障壁要因と情報提供の必要性. 日本痴呆ケア学会, 2(2), 158-181.
- 品川俊一郎, 中山和彦 (2007): 認知症患者の早期受診・介入の障害となる要因に関する検討—一般市民・かかりつけ医・介護支援専門員のアンケート調査より. 老年精神医学雑誌, 18, 1224-1233.
- Tierney M., Charles J., Jaglal S., et al. (2001): Identification of those at greatest risk of harm among cognitively impaired people who live alone. *Aging, Neuropsychology, and Cognition*, 8(3), 182-191.
- Tuokko H., MacCourt P., Heath Y. (1999): Home alone with dementia. *Aging & Mental Health*, 3(1), 21-27.
- U.S. Congress, Office of Technology Assessment. (1990): Confused minds, burdened families: Finding help for people with Alzheimer's disease and other dementias. U.S. Government Printing Office, Washington DC.
- Webber P., Fox P., Burnette D. (1994): Living alone with Alzheimer's disease: effects on health and social service utilization patterns. *Gerontologist*, 34(1), 8-14.
- Wilkins C., Wilkins K., Meisel M., et al. (2007): Dementia undiagnosed in poor older adults with functional impairment. *Journal of the American Geriatrics Society*, 55(11), 1771-1776.
- 山本志織, 鎌田頼子, 大石紀子 (2006): 認知症があってもその人らしい独居生活を続けているふたつの事例から学んだこと～我が家で楽しく生き生き～. 北海道勤労者医療協会看護雑誌, 32, 68-70.